

3 弥生時代

紀元前三世紀から紀元後三世紀までの約六百年間を弥生時代といいます。中国では漢、ヨーロッパではローマが栄えていました。弥生時代には稲作がはじまり、金属器も使われはじめます。八代でもこの時代に人口がふえてきたことが、あちこちで見つかった土器で想像できます。しかしこまかい調査が進んでいない現在では謎もたくさん残っています。

深田遺跡の発見

昭和三十三年二月の中頃、雨あがりの非常に寒い日、めったに通らない姫高（今の城乾中）の東の道を通って西高へ行く中浜哲朗君（当時西高生）は、木村病院の新築基礎工事で掘り上げた土が黒褐色なので気になり、自転車を



とめて見わたしました。すると弥生式土器のような一片がおちていたので、さらにながしているとサヌカイト片が一つ、弥生後期の土器片が多数みつかったので工事の穴のなかを見ると、砂まじりの黒青土に土器片がギッシリふくまれていました。

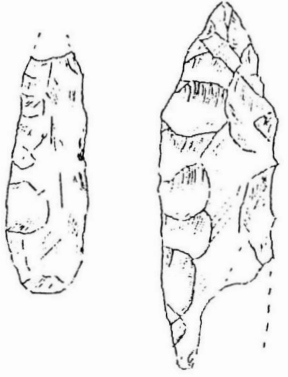
その後もつづいてしらべると、三〇センチの表土の下は須恵器を少し含む三五センチの黒色土層、つづいて粘土層が三五センチ、その下が砂まじりの黒青色の土となっていました。出土品には弥生土器のほかに石矢じり二つ、石さじらしいもの一つ、石くず少し、うす

▲八代深田遺跡付近
+印は木村病院

深田遺跡の付近

このあたりは広く土器が散布していた所のように、男山の西のふもとと山野井町では明治以後、弥生土器や石矢じりを発見したという記録もあり、近くの住人も城乾小学校の東方の畑（八代一三二・一三三番地）で昭和二十年代の終戦まもない頃、須恵器の破片をかなり拾っている。その須恵器は表面が磨耗しているがカメ・ツボ・坏・高坏などの破片。

▲中浜君が木村病院建設場で見つけた石の矢じり（実物大）



い板や三角柱の木片もありました。

この発見のきっかけは松本正信君から次の話を聞いていたからです。それは昭和三十年頃、姫高生物教室前の花壇で松岡秀樹君（当時姫高生）が弥生土器をみついていたこと、昭和三十二年八月、ここより北の方の道路工事で松本君が弥生土器を拾っていたことなどです。（『姫路古代誌』2による）

その後の調査

中浜君が遺跡を発見した翌三十四年五月二十三日、同じ道を通っていた松本君は、さきに中浜君が発見した遺跡から五〇ほど南の小川にかける橋の工事で掘り上げた上の中から弥生土器がのぞいているのを見つけました。西高郷土班の加藤史郎君らの協力で窓付土器、蓋形土器の破片、楯目の文様や凹線のはいつた土器片をたくさん採集しました。これらの土器をよくしらべてみると弥生中期のものらしいことが分かってきました。一日でいえば約二千年前のものということとなります。手柄山の南方で同じ時期の

遺跡が数か所みつかつていますが、このたびの発見で、また新しい資料が加わったのです。

松本君はますますファイトをもやしたのでしょう。姫高構内に体育館が建てられることも見逃しませんでした。そのすじに願いで、昭和三十六年八月の夏休みに、体育館予定地の発掘予備調査をしました。矢内、松岡も参加しました。当時は今のように入夫をやとって長期間、徹底した調査をする予算のつく時代ではなかったので、土器がたくさんあることを確認して終わりました。かつて増田重信氏が、このあたりは微高地で人がすみつづくのに適する地と話し

土器の研究

今里幾次氏は、男山の西で昭和三十四年、松本君らが採集した土器をくわしくしらべ、楯がきの文様が少なくなり凹線が増してきていることから、弥生中期もその終わりごろのものだという。



▲短頸小型壺形土器

元姫高体育館予定地から
昭三六、八 出土 高さ約九cm

（市教委提供）

ておられたとおり土器もかなり出土しました。弥生土器をはじめ、弥生時代の次の時代の土師器や須恵器などです。これらの一つひとつは姫路市教育委員会発行の『八代深田遺跡』にくわしく書いてあります。



深田遺跡の

発掘調査

第一次調査 昭和五〇年九月二十九日

一〇月三〇日

姫高が辻井へ移転したあとは、長らく姫路市役所の分庁舎になっていましたが、やがて城乾中学校を新築することになったので、校舎建築予定地に一辺二畝の穴を十二か所あけて調査しました。

土層のようすは、七〇センチ下は元の田の耕作土、その下は粘質土層で土師器や須恵器の細片が含まれていました。

それより下の層をおおまかにいえば白灰色、黒灰色、灰色の各粘土層、それに砂礫層がつづき、弥生土器は各粘土層の中にありました。

土層のようすは、東部では黄褐色粘土層があつて、もとは微高地であつたことを示しています。西へいくほど低湿地特有の

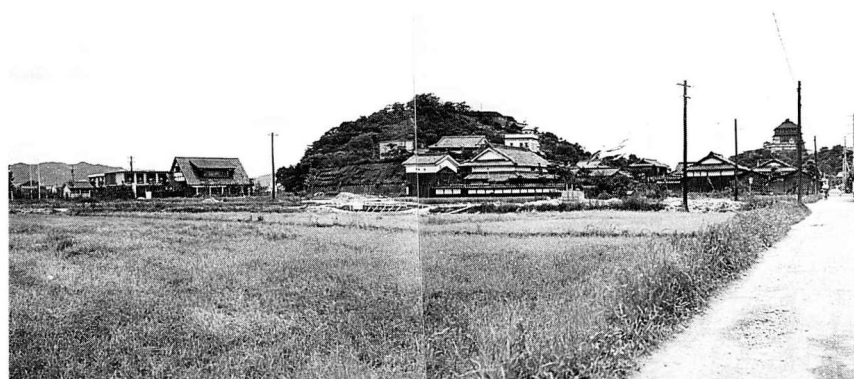
▲発掘調査地の原状

元姫高運動場の南部（市教委提供）

◀男山西麓

前ページの中浜君が見つけた遺跡は左の洋風の建物・木村病院のところ、松本君が調査した遺跡は写真の中央部にある

（昭三四、六、一 矢内写）





甕形土器

表面にススがついている
高さ約18cm



円窓付壺形土器

乳白色 高さ約22cm



高坏形土器

乳白色 小さな穴が一つ
高さ約15cm

(いずれも市教委提供)

白灰色、黒灰色、灰色の粘土層が厚く堆積していつも水がたまっていたことを示しています。

二つの穴に杭列がありました。水ぎわに打って土どめにしたようです。

土器の破片は数千個みつけましたが、それらは北の方から流れてきた状態でした。家の跡は見つかりません。村はもう少し北にあったのでしょうか。

出土品から、このあたりに人が住みつ

ようになったのは弥生中期、つまり二千年前ごろからであることが分かってきたのです。(『八代深田遺跡』による)

第二・三次調査 昭和五六年三月～七月

城乾幼・小の校舎予定地の調査です。こ

の調査で目をひいたのはカメ棺とツボ棺が小学校の体育館予定地から出てきたことです。

以下『神戸新聞』(昭五六・五・二二)から

「二体の棺は褐色砂質土の中から約四尺の間隔

▶城乾幼稚園建設地の発掘調査状況
(昭五六、七 矢内写)



で見つかった。カメ棺は高さ四十センチ、地下数十センチ付近で出土。直立したかっこうで埋められており、土器でふたがしてあった。一方ツボ棺は高さ約七十センチ、横倒しのかっこうで据えられており、破片になったツボにハチ（鉢）ようの土器でふたがされていた。さらに棺の付近から小判状の穴もみつかった。これらのカメやツボは土圧に押しつぶされたものになっており遺骨や副葬品は見つからなかった。年代はツボなどの破片から弥生中期後半。

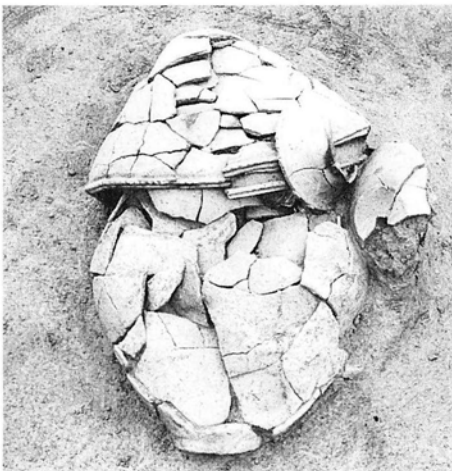
そのほかにも石器、縄文・弥生土器、かわらなどの破片が連日出土、とくに弥生土器片はこれまでの発掘でコンテナ約百杯分も出土した。

ほかにもこの遺跡の周辺では見られない雲母入りの弥生土器片もみつかったが、これは大阪・河内地方から搬入されたものらしい。東海地方からの搬入品らしい円窓土器も見つかった。

しかし住居跡は見つからなかったが、南北約三十センチ、幅一センチ、深さ数十センチ、U字型の溝状遺構がみつかった。市教委は集落は溝状遺構から西側にあるものと推測、溝状遺構は墓地と集落の境界を示すものとみている。

深田遺跡の説明板は城乾中学正門にある。

◀ツボ棺の出土状況（市教委提供）



富士才遺跡 昭和四十年の冬、四・二日に二跡の調査

・四軒の地下室をつくるため、ひとりてコツコツ地面を掘り下げている村田托美氏（元広嶺中学校用務員）は、地表下一メートルあたりから素焼の土器片が、まばらに出現の気づきました。そのうち比較的大きいものとはとっておきました。深さ一・九メートルまで掘り下げ、これで工事を終わろうとした三月二十四日、断面に赤色の土器がのぞいているのを見つけました。工事の見とお



▶ 八代富士才遺跡付近
遺跡は八代字富士才七番地の九

しもついたことだし、一つくらいは大きなものをと、特にていねいにまわりの土を竹べらでのけているうちに完全な土器らしいので、矢内に知らされました。さっそく行ってみると、写真のような状態で土器が見えていました。

前日の雨で穴には水がたまっていたので土器のまわりに簡単な上手をつくり排水しながら調査しました。表上からは黄色粘土層、灰色粘土層と厚く堆積し、灰色粘土層



▶ 土器の出土状態
白い縦の直線は、1mの尺、その右下に土器が見える。（昭四〇、一六、矢内写）

西高校庭出土の土器片

昭和三四年ごろ、1mほど掘り下げたとき、弥生土器らしい小片、須恵器が数十片でた。なかに糸切り底もあり奈良時代のものと思われる。

（加藤史郎君）

富士才遺跡

この遺跡から西七・mには船場川があり、川ぞいで昭和三四年ごろ井上誠君（当時姫工高生）が弥生土器片を拾ったことがある。

川の東は南北につづく微高地、地理学上で自然堤防という。弥生時代にはこの近くにも人が住んでいたようだ。